

想像上の戦争——文化にとって冷戦とは何か

アン・シェリフ

“Each new means of destruction ...also requires a greater level of social anesthesia to normalize its impact on daily life”

Walter Benjamin

1. はじめに

数年前に『日本の冷戦：メディア、文学と法律』（*Japan's Cold War : Media, Literature, and the Law*, Columbia U.P., 2009）という本の中で、日本の文化にとって冷戦とは何だったのかといろいろ書いてみました。時代が同じでも普通は一緒に考えない1950年代の文学作品、映画、作家、出来事を「冷戦文化」という枠組みで扱いました。例えば、太陽族の人気作家だった石原慎太郎と元共産党の映画監督亀井文夫、「チャタレー夫人の恋人」和訳裁判と広島反核運動といった具合です。冷戦というプロセスはハイポリティクスのレベルにのみ現れるのではなく、文化生産にも強く影響を与えています。冷戦がいろいろな意味で文化に影を及ぼしているのは、特に国際関係が落ち着かず、緊張がもっとも高かった1940年代後半から1950年代にかけてです。

一例として、黒沢明監督の「生き物の記録」（1955）という映画が挙げられます。多くの評論家がこの映画を失敗作と評価していますが、黒沢が時代の様々な問題に向き合おうとしているからこそ、興味深い作品だと考えられます。「生き物の記録」には核兵器の心理的暴力が描かれていますが、冷戦時代と関わりがあるテーマやモチーフはそれだけではありません。黒沢は、この映画で家庭中心主義(domesticity)、拡大しつつある中流階級、政治に対す

る無関心、人権を守るといった新しい戦後のアメリカ法の影響を受けた新憲法の制定と法制度改革、反抗する若者の文化も描いています。

当然のように思われるかも知れませんが、歴史的な時代区分の定義をいかに選択するか、ということは、私たちの研究の対象と方法に強く影響します。例えば、1945年以降の日本文学の生産や受容の歴史的な文脈を、専門の研究者は通常「戦後」と呼んでいます。「戦後」という時代区分のなかで、終戦直後、占領期、高度経済成長期、バブル期など、さらなる区分はありますが、戦争がおわって約70年が経つ現在でも、「戦後」という考え方を使い続けています。「戦後」という時代名称を使うことの問題のひとつとして、「いつ（またいかにして）戦後は終わるのか？」（Post-postwar、すなわち「戦後以降」というものはありえるのか？）という問いがあげられます。¹

日本文学研究では、冷戦の構造と戦略が、日本には影響がないもの、あるいは文化や日常生活のレベルでは感じられない、あたかも外部につくられた装置であるかのように冷戦体制が言及されることが頻繁にあります。また「時代」としての冷戦、つまり、ある時代の流れと社会的・文化的プロセスであり、日本もその一部である、というアプローチはあまりみられません。

私が「日本の冷戦」という研究に取り組もうと思った理由のひとつに、この時代区分の問題があります。特に、「戦後」という枠組みを絶えず使って、1945年以降の日本史をもっぱら第二次世界大戦だけに結びつけるということには問題があると思いました。第二次大戦／アジア太平洋戦争は、物質的、経済的、政治的、文化的、精神的にも多くの遺産をこの日本に残したことは否定できません。しかし、冷戦における非常にリアルな政治、文化、社会の流れから日本は除外されていたといえるのでしょうか？日本も、冷戦のグローバルな力学に深く関わっていたのではないのでしょうか？そして、冷戦後の世界で、日本もまたその役割を担ってきたのではないのでしょうか？

ここで一旦、「冷戦」というコンセプトを定義したいと思います。ここでいう「冷戦」とは、グローバルな地政学的かつイデオロギー的紛争をさします。冷戦は第二次大戦後の世界を支配した地政学的、かつ文化的な紛争で、二つの超大国とその衛星国の間の、終末論的な惨事という脅威にもとづく善と悪のパワフルな物語によって突き動かされていました。また、脅威的かつ

使用不可能な核兵器、抑止力という概念、そして自由市場概念とマルクス主義のイデオロギー的衝突も冷戦の中心にありました。ここでは、冷戦の始まりを、おそらくこの広島では原爆投下の時点である1945年とし、また、その終わりを1989年から91年ごろにかけて、ソビエト連邦の解体とベルリンの壁の崩壊の時期とします。また、冷戦期には脱植民地化も重要なプロセスでした。

ヨーロッパや北アメリカにおいて1990年代から、冷戦研究の分野は急進的に変化をとげました。最近の欧米の冷戦研究に関する3つのテーマについて触れたいと思います。まず冷戦研究において長らく支配的な焦点であったエリート政治と外交についてお話しします。次に、近年のアメリカとヨーロッパにおける冷戦研究の動向、特に文化研究への転換についてです。最後に、アメリカ人研究者として、アメリカ社会で冷戦の言説を形成させた政治的文脈についてコメントし、また、冷戦をめぐる信じられていたことの多様性、例えばディーン・アチソンなどのエリート政治家にまでおよぶ、驚くほどの多様性についても言及したいと思います。

2. 冷戦研究の伝統的モデル

米国の著名な歴史学者ジョン・ガディスは冷戦についての著作がよく知られています。ガディスをはじめとするアメリカの主要な歴史や政治学の学者にとっては、冷戦とはトルーマン、スターリン、ケネディ、フルシチョフなどの大国の指導者の経歴をたどることであり、また、アメリカ、ソ連、中国、その他の主要なプレーヤーの外交政策や軍事政策を検証することでもありました。ガディスや彼と似た立場をとる研究者に共通する認識は以下のようなものでした。まず冷戦は超大国間の二極的な戦いと見られていました。この二極構造における緊張関係は、白と黒の対決、善と悪の衝突、キリスト教対無神論、あるいは共産主義と民主主義、というようなレトリックで表現されました。核兵器は望ましくはないが不可避の現実とされ、核兵器および核体制は正当化されました。

ガディスは高名かつ精力的な研究者ですが、彼が冷戦について導く結論のなかには非常に疑わしいものもあります。ガディスなどの歴史学者の結論は、

冷戦は「Prolonged period of peace」つまり「長きにわたる平和の時代であった」というのです。確かに大国間での交戦はなく、また核戦争もおこりませんでした。が、「第三世界における100を超える戦争」では、何千万人も犠牲者をだしました。²

さらに、ガディスの信奉する認識は、西側は「正しい理念」を代表しているものであり、だからこそ「軍備政策や戦略決定は（中略）正当化される」というものでした。この意味で、ガディスは核兵器を「あらたな合理性のための根拠」とであるととらえていたのです。³ またガディスは、冷戦の歴史を、陰鬱で不明瞭な統治システムと思想体系に対するアメリカの勝利として描いています。ロナルド・レーガンがソ連をスターウォーズにでてくる「ダークサイド・暗黒面」に喩えたことにならい、ガディスはスターリン主義国家の残虐性と、マルクス主義思想・レーニン主義思想など自由市場に疑問を呈するあらゆるものの複雑性と見識をひと括りにしているのです。しかし、このようなエリート政治のアプローチが見落としているのは、冷戦における日常生活、生きられた経験、文化、ふつうの人びとの経験です。こうした過去の歴史研究の流れは、冷戦と、またアメリカ及びいわゆる「自由主義世界」の「勝利」としてのポスト冷戦体制を肯定しようとしてきました。

ガディスの世代はこのようなエリートのアプローチに依拠し続け、ガディスはこの枠組みを維持するために多大な努力をし、さらに冷戦そのものを正当化しようとしています。例えば、Cambridge History of the Cold War (2010) という本における最近の論考で、ガディスは冷戦を第一次世界大戦や南北戦争などの近代の戦争としてはとらえず、かわりにギリシャやローマといった古代の世界の戦争の概念や実践と平行するものとして説明します。

The ancient Greeks made no sharp distinction between war and peace. Wars could last for years, even decades …… The modern state system, which dates from the seventeenth century, was meant to stake out boundaries that did not exist in the era of Homer, Herodotus, and Thucydides: nations were either to be at war or they were not. But the boundaries blurred again during the Cold War, a struggle that

went on longer than the Trojan, Persian, and Peloponnesian wars put together. The stakes, to be sure, were higher. The geographical scope of the competition was much wider. In its fundamental aspects, however, the Cold War more closely resembled the ancient Greek wars than it did those of the eighteenth, nineteenth, and early twentieth centuries.⁴

古代ギリシア人は、戦争と平和をはっきり区別しなかった。戦争は何年も、数十年にわたって続くことさえあった。……17世紀から成立した近代国家体制は、ホメロス・ヘロドトス・トゥキュディデスの時代には存在しなかった。近隣国との境界線を作るためのものだった。国家体制（や国際法）によって戦争状態と平和との区別も明確になった。しかし、トロイア戦争、ペルシャ戦争、ペロポネソス戦争を合わせたよりも長く続いた冷戦時代には、国と国との間の境界線が再び曖昧になった。（冷戦は）古代ギリシアの戦争よりはるかに危険な争いであったし、地理的範囲はずっと広がったことは間違いない。しかし、冷戦は基本的には18世紀、19世紀、および20世紀前半の戦争より、古代ギリシアの戦争に似ていた。

このようにガディスは、西洋文明のまさに根本から出現したものとして冷戦を位置づけています。ガディスの喩えが正確であるかどうかは問題ではありません。ここで注目すべきなのは、ガディスが冷戦を地政学的な歴史からひきはがし、かわりに理想化され崇拜された古代におきかえていることです。そうすることによって、ガディスは冷戦の、病理的で破壊的な要素を消し去ってしまっているのです。そのなかには私たちと今日も共にあるような要素もあるにもかかわらずです。

別の箇所では、ガディスは核武装競争と「心理戦」が激化するにつれ、またアメリカが封じ込め政策を展開するにつれ、超大国の拡張主義的傾向を権威づけてさえもいます。ガディスによれば、「アメリカ人は、古代ギリシア人のように、防衛なしにやりすぎず自信を失った。代わりに彼らは勢力拡大

と共に不安さを得た。『恐怖が我々の重要な動機であった』とトゥキディデスはアテネ人をつうじてスパルタ人に伝えた。『我々の帝国をあきらめるのはもはや安全ではないと思われた。特に逃げたものが皆あなたに敗北するのだから。』⁵』 となります。

ガディスが別の箇所ではアメリカを民主主義を与える者として賞賛し、ソビエトの帝国主義的な行為を批判していることを考慮すると、ガディスによるアメリカと古代ギリシャの比較は皮肉なものです。

初期の冷戦研究は、同盟国や従属国家、それに部外者についての考察を犠牲にしなが、二極的な緊張関係と超大国の関係についての力学を強調するものでした。超大国以外の文化勢力が関わった場合でも、その重要性においては派生的、もしくは二次的なものとして枠付けられていました。それに対して、近年の冷戦研究は「冷戦についての先行研究におけるハイポリティックス（高等政治）の特権的位置づけの修正」を提示していますが、これによれば先行研究はつまるところ、勇敢な戦いというよりは、超大国間における「相手の意図の誤認や互いの能力に対する過大評価」の記録であることが多かった、ということになります。冷戦研究におけるこうした変化は、「『一般的な』歴史、特に国際関係をほんの一握りの『偉大な』重要人物たちの行為の結果として認識するような、国家中心主義的な19世紀末の新ランケ学派の歴史学」の批判と呼応していることは、疑いの余地はありません。⁶

過去15年間、多くの歴史学者、政治学者、人文学者が高踏的なハイポリティックスと外交関係に焦点をあてたガディスの研究を問題にしてきました。冷戦は、想像上の戦争、つまり経済や文化やイデオロギーのレベルでのプロパガンダとの戦いであったからこそ「冷たい」戦争だったのです。ガディス氏の言う「長き平和」の概念は韓国、ベトナム、アフガニスタンでの戦争を「限定戦争」limited war と定義することによって成り立っていますが、その言説を一步踏み出せば、それは、限定戦争どころか、膨大な殺戮と非常にリアルな暴力をとまなう「熱い」戦争だったことが目に見えてきます。さらに、戦後最初の30年のあいだにおきた、脱植民地化と民族独立の、平行かつ関連した過程の重要性も加えて指摘しておきたいと思います。

3. 変化する冷戦研究

文化を冷戦の「解釈の領域」としてとりあげる近年の研究においては、「冷戦文化」と「文化的冷戦」の違いを説明します。「文化的冷戦」とは「(西側と東側の)ブロック間での文化的外交」を意味します。国家や政府がこうした文化的外交の扇動をする場合が多く、バレエやクラシック音楽などのエリート文化からジャズ、ロック、映画などの大衆文化まで、幅広い範囲にわたって動員されました。換言すれば、国家は、相手陣営の市民の心を勝ち取るために、文学やその他の芸術を「武器」として使用したのです。

一方で、「冷戦文化」とは、冷戦の力学が作りあげた「日常社会的存在」という、幅広い考え方のことを指します。こうした人類学的意味において、冷戦文化は「意味作用のマトリックス」「連動する意味」interlocking meanings とされました。つまり、冷戦文化は地政学的、文化的、政治的な力学によって形成された「意味と行動のシステム」であった、といえます。⁷ 西側陣営の(最終的にはソ連にも波及した)「コカ・コーラ化」についての研究や、核戦略家のジェンダー化された言語や言説の研究から、米国において冷戦の動機から派生した「地域研究」(Area Studies)といった学術領域の創設まで、多くの角度からの検証が可能です。東西両陣営のメディアをひそかに形成するにあたってのC I Aやコミンテルンの役割は、ヨーロッパやアメリカでの重要な学術論争の中心にありました。

この20年間、冷戦研究は、世界のどの国よりもアメリカで活発になりました。アメリカの学界の文脈では、1945年以降のアメリカ史は冷戦とポスト冷戦の歴史と見なされるようになってきています。従来の戦争とは違い、冷戦は「心」を勝ち取るという目的、つまりあるシステムやイデオロギーが別のそれより優れている、ということをもとに納得させるために戦われたのです。

文化史と社会史からの冷戦へのアプローチは、支配的な冷戦研究のいくつかの還元主義的な見解を修正しようとしています。これらの画期的なアプローチと枠組みは、(A) 二極的闘争としての冷戦の拒絶と、代替として第一、第二、第三世界におよぶ冷戦の「グローバルな広がり」を理解する。(B) 多様な国内戦線における「冷戦の人々への精神的なインパクト、又は決定要因

としての冷戦の信条、アイデンティティ、文化実践、社会形成への影響」を、生きられた経験としての冷戦という枠組みでとらえることです。⁸

冷戦は、アメリカの外交政策ばかりでなく、アメリカ人の社会生活や文化生産にも普く影響し、それはアメリカ社会での冷戦のありかたについての何十年にもわたる学術研究につながりました。事実、こうした研究は最近とても支配的であったため、多くのアメリカの研究者がアメリカの冷戦文化があらゆる冷戦文化を構成する、というような短絡的な見識を発展させるにいたりました。このような研究者は、比較論的な視点の重要性に興味を示さないどころか、気づいていないような場合もありました。研究者ばかりでなく、大衆メディアも、民間防衛政策（Civil Defense programs「ダックアンドカバー・さっと隠れて頭を覆え」）、核シェルター、核兵器の矮小化（有名なキノコ雲型ビキニなど）などといった、「ポピュラー」でキッチュで、時には愉快的な1940年代から50年代アメリカの表現に魅了されました。学術レベルでは、エレイン・タイラー・メイなどの歴史学者が、冷戦の観念である封じ込め政策が、いかにしてジェンダーアイデンティティやアメリカの家族理念を形成するほどアメリカ社会に浸透したかを明示しました。ある意味で、冷戦についてのコンスタントな強調は、アメリカの勝利主義者のアイデンティティの症状かもしれません。

しかし、それだけがすべてではありません。あまりにしばしば二極的な文脈（超大国について）でとらえられ、また他者の経験や視点を排除してきたような想像上の戦争として、冷戦を描写する研究が、ヨーロッパやラテンアメリカや台湾などの研究者や、さらには世界各地の文化史や社会史の研究者が、意見やエージェンシーを主張するための方法として機能してきました。それに対して、文化、社会史、日常生活などのカテゴリーを誘発するような冷戦へのアプローチを支持してきた研究者は、「想像上の戦争」としての冷戦を指摘しています。

文学研究では、冷戦というカテゴリーは関連性が深いし有用性も高いです。その時代を通じて、「文学の文化的冷戦への関わりは真にグローバルな現象であった。（中略）前線で劇が演じられ、路上の抗議で詩が朗読され、というように文学は危機の時代の継続的に存在した。（中略）詩人や小説家は反政

府活動の前衛に位置づけられた。」⁹ 文学やその他の芸術を冷戦の文脈にあてはめることで、文化的交換と「政治、軍事、経済の領域では非現実であった」超大国の権威に対する隠れた抵抗をわたしたちは見ることができるのです。映画、文学その他の芸術は、抵抗の流れだけでなく、冷戦イデオロギーと政治的な現実への服従をも映しだします。冷戦研究の成熟にしたがい、研究者は、いかにして想像上の戦争が保守的な文化勢力と進歩的な文化勢力とを形成したか、ということをもさらに深く掘り下げるようになります。

アジアにおける冷戦文化の分析においては、軍備競争や広島・長崎の研究を超えなくてはなりません。というのも、いかにして「冷戦の力学が1945年以降の環境における日本、朝鮮半島、中国の共有された複数の歴史を形成したのか」を検討するためです。日本は報道の自由と情報へのアクセスが相対的に自由なため、個人やメディアや芸術についての史料研究は非常に良質なものです。かつてのソ連と同様に、中国のアーカイブは相対的に閉じた状態にあるので、研究者は国営のアーカイブでの調査ではなく地方での史料調査に行くことが多くなります。こうした地方での調査は、冷戦の絶頂期であった初期毛沢東時代に「地方の社会とより広範な国家レベルでの政策や流行をリンクする」研究をもたらしました。¹⁰ さらにヨーロッパの研究者は、英国や西ヨーロッパの自由でオープンであるはずの報道がいかに冷戦の政治的意図によって妨害されたかということをも明らかにしました。

さらに近年では、研究者は冷戦中に個人や団体がいかにして「第三の空間」または「二極化された1989年以前の世界観」を超えた中立の立場を創造しようとしていたかということを調査しています。中立主義運動などにとっては、第三の道は「冷戦の二極的なロジックを超越しうる」し、「西洋の資本主義と『現実存在する社会主義』を特徴づける、核武装主義、軍国主義、物質主義への非全体主義的な解決方法を提示しうる社会的・政治的な発展」のための代替的なアプローチを模索しうるものでした。¹¹ 文化的な面では、こうした第三空間的な枠組みは「第三のアジア」でおこりつつある「比喩、接点、媒介、ハイブリッドと周縁の現象」を強調します。ホミ・バーバの「第三のヨーロッパ」という概念はポストコロニアル理論とポストモダン理論をもとにしており、中央ヨーロッパの第二世界の国々にや日本などの従属国家を看

過する傾向があります。これに反して、さきあげた冷戦文化の枠組みは「より広大な地政学的な複数の地平のあいだの『（複数の）中心』かつ『接合部分』としてその地域をあつかうダイナミックな地域主義という概念」を強調しています。トゥオン・ヴはこういっています。「冷戦中におけるアジアのアクター、市民のビジョンと政治的忠誠心は、理想的な政治共同体としての国民国家に限定されることなく、より広い範囲に及んでいた。」さらに、アジアの人びとは「冷戦の拡張において超大国と同等な責任を共有していた。……そしてアジアの土着の政治過程は、冷戦において『逆からの』影響を及ぼした。」¹² ワシントンDCにある冷戦歴史プロジェクトは、東アジアにおける冷戦の研究をこんにちの研究者の最優先課題として重要視しています。

4. 歴史としての冷戦

冷戦研究が、そのルーツをアメリカに持つという事実と、長年アメリカ特有の偏見を見せて来たということが、日本の研究者が分析カテゴリーのひとつとしての冷戦研究をこれまで避ける傾向にあったことの理由の一つであると思います。最後になりますが、ここで、冷戦という概念の複雑な意味を継続して研究することが、超大国をあつかう場合においても、いかに重要であるかについて、私なりの暫定的な見解を述べます。

アメリカの封じ込め政策の進化は、日本を従属化させることを目的とした新帝国主義的な冷戦の政治的意図の一部であったとして、とくにベトナムや他の地域でのアメリカの破滅的な軍国主義のあとでは、頻繁にやり玉にあげられています。しかし、アメリカがかつてない威信と権力をもっていた冷戦の初期段階では、封じ込め政策の意味は現在わたしたちが推測するものとは違っていました。実は、トルーマン大統領時代の国務長官であったディーン・アチソンは「総力外交」をアメリカの冷戦政策の中心的な戦略・道具として位置づけました(1950年には「冷戦」とは呼んでいませんでしたが)。¹³ 総力戦に対する総力外交です。

アチソンの「自由世界」の同盟国を勝ち取るための外交的かつイデオロギー的手法という主張は、ハーバード大学教授のジョン・K・フェアバンクの、アメリカは「民主主義に好意的な経済環境を育てるために健全な国際貿易を

促すことによって」「日本を共産主義から引き離しておくべきだ」という主張ともよく似たものでした。フェアバンクは日本を「アジアの産業力と軍事力のすぐれた潜在拠点」とみていました。中国史とアジア史の研究者であるフェアバンクは、「アジアの土地を西洋列強が獲得できる時代は終わった」と警告しました。中華人民共和国の成立直後に台湾と「一方向的な交渉」をするというアメリカ側の試みは、「暴力的かつおそらくは正確に『帝国主義的』である、という非難を他のアジアの非共産各国に抱かせるという結果をみちびいた。」¹⁴ フェアバンクはアメリカの「アジアに関する知的な弱さ」を嫌っていましたし、マッカーサーが政治的に利用したアジアについての無知を「我々を自分自身の恐怖にからめとられた愚か者であるとアジア人に思わせている」として理解していました。¹⁵ フェアバンクはかつて中国で暮らして研究をしたので、当時の中国の農民大衆の貧困と文盲のことはよく知っていました。彼は「社会の変革」をもたらすのはアメリカの役割であると信じていました。また、一世紀前に「我々の宣教師がその後の西洋との関わり先の先陣としてアジアの革命を始めたように」、彼のいう「革命」を促すこともまたアメリカが担うべきだと信じていました。当時勝利を収めたばかりの中国共産党への恐怖などとはほど遠く、フェアバンクはマルクス・レーニン主義哲学の魅力を、「混沌とした社会勢力をコントロールし、秩序と福祉をもたらすことができ」、かつ「自分たちの独自の自律した新しい社会秩序を開拓」に努める「アジアの人民」を支えることができる「科学」だと理解していました。このハーバードの教授はこのようなかたちで、マルクス思想（魅力的な「共産主義の約束」）を、中国では「ほぼ知られていない」「ロシアのマルクス主義の売春婦」（「一党独裁主義」）と区別しました。¹⁶

1950年代の狂信的な反共の気運のなか、アチソン自身もトルーマン大統領とともに、背信と共産主義者とのつながりのかどで悪名高いジョセフ・マッカーシー上議員とその取り巻きによって糾弾されました。例えば、リチャード・ニクソンはアチソンを「軟弱封じ込め政策大学の赤い理事長」という汚名をきせました。¹⁷ マッカーシーと彼の保守的な仲間は、「勇敢」で男性的な軍事手法で共産主義と戦うことを好んだのは明らかです。

このようにして、冷戦の勝者としてのアメリカという勝利主義者的な憶測を複雑化することの重要性がわかります。

冷戦を理解することは冷戦以降の世界の意味を解明する助けになります。グローバル化に支配された今日の世界にも関連する、実践や思想がその時代から残っているのか、世界的な権力としての中国の勃興、自己を冷戦の勝者であるといまだに空想しているアメリカの衰退、冷戦の歴史を振り返って見る必要があります。

Works Cited

Cold War International History Project (www.wilsoncenter.org)

“The Cold War International History Project (CWIHP) was established at the Woodrow Wilson International Center for Scholars in Washington, D. C., in 1991 with the generous support of the John D. and Catherine T. MacArthur Foundation.

“The Project supports the full and prompt release of historical materials by governments on all sides of the Cold War, and seeks to accelerate the process of integrating new sources, materials and perspectives from the former “Communist bloc” with the historiography of the Cold War which has been written over the past few decades largely by Western scholars reliant on Western archival sources. It also seeks to transcend barriers of language, geography, and regional specialization to create new links among scholars interested in Cold War history.”

Cornis-Pope, Marcel. “The Search for a Literature of the ‘Third Way’.” In *Global Cold War Literature: Western, Eastern and Postcolonial Perspectives*, Ed. Andrew Hammond. New York: Routledge, 2012.

Fairbank, John K. "American Participation in the Asian Revolution." In *The Atomic Era: Can it Bring Peace and Abundance?* Ed. Freda Kirchway. New York: Medill McBride Company, 1950, pp.11-25.

Gaddis, John Lewis, "Grand Strategies in the Cold War," Cambridge Histories Online Cambridge University Press, 2010.

Hasegawa, Tsuyoshi, ed..*The Cold War in East Asia*. Washington, D.C: Woodrow Wilson Center and Stanford: Stanford University Press, 2011. (Roundtable review: <http://www.h-net.org/~diplo/roundtables/PDF/Roundtable- XIII-30.pdf>)

Hammond, Andrew. *Global Cold War Literatures: Western, Eastern and Postcolonial Perspectives*, New York: Routledge, 2011.

Major, Patrick and Rana Mitter. . "Culture," In *Cold War History*. Eds. Saki R. Dockrill and Geraint Hughes. New York: Palgrave Macmillan, 2006, pp. 240-241.

May, Elaine Tyler. *Homeward Bound: American Families in the Cold War Era*. Revised Edition. New York: Basic Books, 2008.

Sherif, Ann. *Japan's Cold War: Media, Literature, and the Law*. New York: Columbia University Press, 2009.

Vu, Tuong and Wasana Wonsurawat. *Dynamics of the Cold War in Asia: Ideology, Identity, and Culture*. New York: Palgrave Macmillan, 2009.

Ziemann, Benjamin. "Situating Peace Movements in the Political Culture of the Cold War," in *Peace Movements in Western Europe, Japan and the USA during the Cold War*. Essen: Klartext Verlag, 2007.

注

¹ 吉見俊哉『ポスト戦後社会』（岩波書店、2009年）と又違った枠組みの時代区分。吉見氏は「高度成長の後に待ち受けていたものはバブルの発生と崩壊、いつまでも混迷を続ける政治とそれに伴い深まる政治不信、そして高まる社会不安……。列島全体が酔いしれた「高度成長」の夢のあと、待ち受けていたのは果たしてどんな社会だったのでしょうか。崩れゆく冷戦構造のなかで、日本は激動する世界から取り残されて、もしかしたら次第に周回遅れのランナーとなっていったのではないのでしょうか。」吉見氏は「グローバリゼーション」を問題にしている。

² Hammond, Andrew. *Global Cold War Literatures: Western, Eastern and Postcolonial Perspectives* (New York: Routledge, 2011), p. 7.

³ Benjamin Ziemann, "Situating Peace Movements in the Political Culture of the Cold War," in *Peace Movements in Western Europe, Japan and the USA during the Cold War*, (Essen: Klartext Verlag, 2007), p. 15.

⁴ John Lewis Gaddis, "Grand Strategies in the Cold War," Cambridge Histories Online © Cambridge University Press, 2010 http://ezproxy.cc.oberlin.edu:2088/uid=1809/pdf_handler?id=cho19780521837200_CHOL9780521837200A002&pdf_hh=1, p. 1

⁵ Gaddis, p. 9.

⁶ Ziemann, p. 16, Hammond, p. 12.

⁷ Patrick Major and Rana Mitter, "Culture" in *Cold War History* eds. Saki R. Dockrill and Geraint Hughes (New York: Palgrave), pp. 240-241.

⁸ Hammond, p. 2.

⁹ Hammond, pp. 4-5

¹⁰ Mitter and Major, p. 245.

¹¹ Hammond, p. 2, p. 14.

¹² Hammond, p. 12. As Tuoung Vu notes, "Asian actors' [citizens] visions and political loyalties during the Cold War spanned a much wider

range—not limited to the nation-state as the ideal political community.” People in Asia, furthermore, “shared equal responsibilities with the superpowers in the spread of the war . . . and indigenous political processes in Asia . . . had critical *reverse* impact on the Cold War.” (3)

¹³ John Fairbanks, “American Participation in the Asian Revolution,” Ed. Freda Kirchwey, in *The Atomic Era—Can it Bring Peace and Abundance?* (New York: Medill McBride Company, 1950), p. 11.

¹⁴ Fairbank, pp. 12–13.

¹⁵ Fairbank, p. 14.

¹⁶ Fairbank, p. 18.

¹⁷ <http://carnegieendowment.org/1998/09/14/how-dean-acheson-won-cold-war-statesmanship-morality-and-foreign-policy/4lrj>. “Dean Acheson’s cowardly college of Communist containment.”